

発表者 井上 航 (音楽研究科 博士 (後期) 課程 音楽学領域)

テーマ 北東カンボジア山地民クルンの音響的参与の民族誌——気分と精霊——

## 要旨

本研究は、カンボジア北東部のクルンの人々のなかでの長期参与観察にもとづく民族誌的研究である。当該地域はラオスやベトナムにまたがる山地帯であり、クルンを含む複数の民族がそこで暮らしている。東南アジアでは山地民と総称される、国家の枠組みに長らく包摂されずにきた歴史をもつ民族集団が各地にみられるが、当該地域の諸民族も同様であり、現在、国家に統合されながらも独自の言語、焼畑稲作の生業、アニミスティックなものの見方などを保持している。そうした地域のなかにあるラタナキリ州のカンチューン村が本研究の調査地である。

音響人類学的な視角から本研究は取り組まれている。それは、作業音や自然音がともなう日常的な活動であれ音楽的な活動であれ、身体における「感じる」ということの様態の検討をとおして、音の出ている出来事について探るものである。ローカルの環境的な音とそこに暮らす人々の感性との関係を問題にした S・フェルドとそれに続く民族誌的諸研究、また、踊り、歌い、奏でるさなかに響きあう身体論的存在論を、霊的存在との関連から浮かび上がらせる S・フリードソンに代表される一部の内省的民族誌などが先行研究に挙げられる。

民族誌的な事例としては次のようなものを扱っている。筆者自身がゴング打奏に参与した経験について。コブつきゴング 5 台の合奏や、肉を切り刻む単調な音などがともなう牛の供犠について。病癒し儀礼における祈禱の章句注解、その儀礼の運びの脈絡のなかの祈禱の語気の側面、祈禱以外のさまざまな霊的障害の除去活動の動きの勢いの側面について。複数の精霊憑依の儀礼の音楽的・舞踊的側面などについて。

音響的な経験にかかわる問いのなかでも、何であれ人が居合わせて集まりをもつ際の、人と人がともにあるということがどのように感じられているかという問題に焦点が据えられる。いいかえれば、ともにあるということ、そのつどの楽しさや熱中や、ほかさまさまの感触として、いかに把握し記述へともたらずかが問題である。この問題に取り組む鍵になるのが「参与 participation」の考え方である。それは C・カイルの「参与的なズレ participatory discrepancies」の概念からヒントを得たもので、その問いの着眼点をつきつめると、カイルの議論をこえて、participate という語の独特の意味に突き当たる。それは、原子論的な思考習慣に抵抗するものであり、日本語の「帯びる」という動詞との共通した性格を吟味することで浮き彫りになる。私なりの「参与」の視座は、物事の感触あるいは気分といった質的な次元を照らすもので、事実志向の客観主義よりも現象学的な内省のほうに親近性がある。そこに立脚する本研究は、民族誌が心身二元論的前提を否定なくもってしまう傾向があるために通常では問われにくいところを、あえて目指そうと試みる。

とりわけ「気分」の問題へと記述は方向づけられる。「気分」は、ドイツ語では Stimmung という語になるが、これはもともと楽器などの調律という意味をもっている。M・ハイデガーによれば、気分とはすなわち存在することの様態にほかならず、人間はいかなる状況でも常にすでに何らかの気分のなかに存在している。本研究がこのような問題に導かれたのは、参与観察で接したクルンの人々の多くが、場の気分というものに対して対立的に構えるところがなく、さらには気分を盛り上げたり気分のままに動いたりすることを積極的に尊重しているように見受けられ、それが「ともにあること」の感性の問題にとって根本的だと思われたためである。興味深いのは、人々がふだんから畏怖している種々の霊的存在と、人々における気分というもののあいだには、存在論的に密接なつながりがあると考えられることである (病気と精霊の関係性など)。霊的なものと物的なものが独特なかたちで混交する世界に参与する人々について理解しようとするとき、そのつど人々がどのように気分づけられているか (そのつどどのような「調律」の状態にあるか) が主要な問いとして浮上するのである。